
序 文

本書はこの10年間の検討の所産である。その間、筆者の念頭を離れなかった3つの鍵的言葉が民主政・グローバル化・コスモポリタニズムである。いずれも一連の理念や社会諸過程のことであって、我々の生活に深い影を落とすことになったし、その状況が変わったわけではない。

古代の都市から現代の政治システムに至るまで、民主政はあらゆる政治理念のなかでも最も強力な位置にあり、現に自己決定の期待と成果にとどまらず、現実過程を制約する状況をも映している。都市と国民国家とを問わず、民主政は自らのコミュニティを自ら支配したいという人々の願いと結びつくことで、成果のみならず不満をも呼ぶことになった。民主政は、いかなる独裁的支配とも対立する位置にあるが、その中心的目標からすると、なお不完全な状況に留めおかれている。

グローバル化とは人々の活動組織を再編している一連の諸過程のことであって、政治・経済・社会・コミュニケーションのネットワークはリージョンと大陸を越える規模に及んでいる。権力は特定の地理的範囲や場所で浮上するに過ぎないものではなくて、世界中に広がり、ある場所で起こったことが他の多くの場所にも拡散し得るものとなっている。民主政とは一定の空間と地域や国民的領域における自治の理念であるとする、グローバル化とは相互に作用する活動とシステムのことであるだけに、そのなかで重複型運命共同体が生成し、都市や諸国の行方の連鎖状況が起こっている。

民主政とグローバル化とは方向を異にしていると理解されたり、あるいは

は、そのように見えるかもしれない。これは、民主政が一定の領域における活動の自己組織であるのにたいし、グローバル化は越境型の相互作用の深化を示す言葉であることによる。すると、こうした形態をどのように民主的にコントロールし、説明責任に服せしめるかという問題が浮上せざるを得ないことになる。現代の主な政治理念やメカニズムが特定のコミュニティや空間と結びついて展開をみたすとすると、これをどのように矯正することでグローバル時代に対応すべきかということ、これが問われている。

この疑問に答える糸口を第3に挙げたコスモポリタニズムに求めることができる。コスモポリタニズムという概念によって、各人が、また、万人が道徳的に平等な地位にあるという関心を強くし得ることになるし、家族や倫理感を、あるいは国民や宗教を個別にしつつも、何を共通にしているかについて考えるための基盤ともなり得る。だからといって、コスモポリタニズムをもって、この種のアイデンティティの歴史的・社会的・政治的意味を否定し得るわけではなく、こうした帰属感のなかで共通にしていることが、つまり、所属のいかんを問わず、必要と希望を、また、懸念と情熱を共通にしていることが曖昧にされていることを明らかにし得ることになる。人々の生活が破綻するには多くの理由があるにせよ、共通の原因がある。それは飢餓と疾病や孤独などである。身体的と心理的とを、あるいは社会的とを問わず、基本的必要を満たし得ないでは生活は成り立ち得ない。

こうした理解が求められるのは、人々の活動は多様であるにせよ、その妥当な範囲を、つまり、家族や集団を、あるいは国民国家を異にしつつも、活動には、どのような条件が求められるかを特定すべきであるからにはほかならない。こうした範囲を設定することで、いかなる活動も越えてはならない領域があることを、つまり、焦眉の課題のなかでも、暴力・恣意的決定・権力の性格と程度の範囲を明らかにし得る。

民主政が自己決定に、また、グローバル化が越境型の過程にかかわることであるとすると、コスモポリタニズムは一般的原則にかかわることであって、この原則をもって万人の活動形態と範囲が設定されねばならない。3者を一体化すると、人々の運命は自閉的な政治的・道徳的コミュニティについて検討する

ことで明らかにされ得るわけではないことが、また、ローカル・ナショナル・リージョナル・グローバルのいずれのレベルを問わず、全域で民主政とコスモポリタニズムの原理が守られ、育まれるべきことが理解され得ることになる。世界で最も強力な諸過程と諸力のなかには、公的検討と民主的説明責任に付すべきものがあるとすると、コミュニティの基礎に変化が起きていることを、また、その相互関係を明確にすべきことになる。これが現実の政治的課題である。

だからと言って、コスモポリタンな原理に依拠し、民主的に組織された、ひとつのグローバルなコミュニティを創ればすむというわけではない。現状からすると、我々は多層的で多層型結合社会アソシエーションのなかにいることを認識し、新しい手続きとメカニズムを発見することで、共通の原則と民主的諸過程において結束すべきことになる。そうなれば、政治と経済や社会のレベルを、あるいは環境のレベルを問わず、人々の活動には制約されてしかるべき範囲があることを共通の認識とし、民主政を諸都市からグローバルなネットワークにまで広げ得ることになる。本書は、こうした極めて重要な課題について論ずる。

所収の各章はすべて、当初、小論として執筆されていて、初出については巻末の謝辞で確認することができる。だが、本書に収録するにあたっては大幅に書き換えている。これは議論の豊富化を期し、重複や繰り返しを避けるためである。また、今日からみると、古くなったと思われる資料を差し替えてもいる。なお、「グローバル時代の暴力・法・正義」と題する第4章(2001年11月執筆)は、ほとんど加筆してはいない。それは、この章が9・11事件とその後の軍事対応の意味を明らかにしようとするものであって、数年を経ても、その議論と検討には有効なものがあると判断したからである。各章については、再考することで民主政・グローバル化・コスモポリタニズムに関する私の考えを明らかにするとともに、グローバル時代において、それぞれの基本的原理がどのように変化し、生活とどのように結びついているかを明らかにしている。

本書の構成には多くの人々の影響を認めることができる。わけでも、第6章についてはケヴィン・ヤングが、また、第7章についてはアンガス・フェイン・ハーヴェイが協同執筆者となってくれたことに感謝したい。いずれの章も

彼らの助けを欠いては日の目を見ることはなかったし、詳細を極め得なかったと言える。そして、本書の編集については、ピエトロ・マフェトーンとシャルリエ・ロージャーの多大の助力に負い、その仔細な校閲には計りがたいものがある。

2010年1月

デヴィッド・ヘルド